

挨拶に立った小林天心審査委員長



全体的にレベルがアップし、ユニークなツアーも増えた今回のプランニング・コンテスト



ASEAN 企画大賞に輝いた建部さん
受賞者には盾と賞状が送られた

第3回ASEANツアー・プランニング・コンテスト 新風吹き込む斬新な企画が続々!

今年で3回目を迎えたASEANツアー・プランニング・コンテストの各賞受賞者が決まった。受賞作品はいずれも夢が感じられる内容であるとともに、商品化の可能性も十分に含めた秀作ぞろいとなった。

レベルアップしたツアーが増加

「ASEANツアー・プランニング・コンテスト」は、国際機関日本アセアンセンターが主催するツアー企画のコンテスト。近年、販売されているASEAN諸国へのパッケージツアーが、インドネシア、マレーシア、タイに集中しており、内容的にも各社横並びであることから、一般から斬新な企画を募り、新たな旅行商品開発や各国の魅力の発掘に結び付けたいという目的で、3年前に始まった。

ここで競われるのは、ASEAN10カ国の中から2カ国以上を訪れる周遊型ツアーの企画だ。対象となるのは未販売のもので、夢が感じられる斬新な企画であること、そしてアクセスや現地移動の面などで実現可能なものに限られる。応募資格は、18歳以上の日本在住者であれば外国籍でもOK。今回からは「中・高生特別賞」が新設され、中学生、高校生からの応募も受け付けた。

募集は09年11月30日までの〇カ月にわたって、旅行・観光学科がある大学・専門学校、インターネット、雑誌、テレビ、イベントを通じて行われた。最終的な応募総数は290人・296作品。第1回の126作品、第2回の187

作品を大きく上回る数字であり、コンテストの認知度が年々高まっていることがうかがえる。応募者の多くは大学や専門学校で旅行・観光学を学ぶ学生だ。また「中・高生特別賞」への反響も大きく、中・高生生の応募は52人を数えた。ちなみに社会人は21人で、うち3人が旅行業界人だった(グラフ1参照)。

応募作品の傾向を見てみよう。2カ国以上の周遊旅行を前提としているため、空路・陸路のハブとなるタイやシンガポール、マレーシアは多くの企画で取り上げられているが、ミャンマー、フィリピンの扱いは少なく、デスティネーションの格差はやはり感じられる(グラフ2参照)。特にフィリピンは陸路でつながらないため、テーマの設定に苦勞する面もあるようだ。だが、一方でブルネイのように、扱いが急増したデスティネーションもある。前年度の扱いは6作品だったが、今年度は「アジアの王族ゆかりの地を訪ねる」「アジアの遊園地巡り」「ラマダン明けに王族と会う」など、さまざまな企画で取り上げられ39作品に急増。ブルネイの新たな可能性を感じさせた。

旅のテーマとしては、健康・美容、食、ホームステイが多く見られた。また、1次審査に加わった日本アセアンセンターの測上奨慶観光交流部長代理は、歴史や寺院、鉄道をテーマにした女性の作品が多く、最近話題の「仏女」「歴女」「鉄子」の存在感が増していたという。「全体のレベルは年々上がっています。第1回の時は、現実味はあるものの、夢はあまり感じられない

企画が目立ちましたが、今回は夢も現実味もある企画が多く見られました」(淵上氏)。

きわ立つリサーチ力と斬新な視点

最終審査では、亜細亜大学の小林天心教授、ジャルパックの五十嵐勇アジア・中国部部長、グッドラックツアーのマーケティング室の志賀俊哉室長、JTBワールドバケーションズの楠山賀英アジア部企画マネージャー、エヌオーイーの米沢護スカイツアー東京営業部部長、週刊トラベルジャーナルの細谷昌之編集長の6人による厳正な審査のもと、女性5人、男性1人の受賞者が決定した。

2月17日に都内で行われた表彰式では、審査委員長を務めた小林天心氏が各受賞作品を講評。「とりわけ印象的だったこと」として、応募者が現地の素材についてとてもよく研究していること、ツアーの目的と狙うべき市場が明確であること、歴史・文化・ライフスタイル・食・自然などへのしっかりした目配りができていること、旅行を企画する立場から、扱う国への敬意を感じることで、発想が豊かで、エコロジーなど新しい視点も含まれていたことの5点を挙げ、「少しの手直しで商品化できる企画ばかりだった」と絶賛した。

「安近短」から「3S」の旅にシフトを

小林天心審査委員長

どの受賞作品にも新たな視点があり、旅行会社の企画担当者に刺激を与えるものだった。またプロの目から見ても、わずかな手直しで商品となりうるものばかりだった。現在の旅行市場におけるASEAN諸国へのツアーは、都市かビーチを訪れる「安近短」の商品が中心だが、ASEAN諸国は民族・文化・歴史・自然など多様性に富むエリア。

企画者が「短い日程」とか「低価格」という思い込みを捨てれば、可能性は無限に広がるのではないかと。今後は「スロー」で「スモール(少人数)」かつ「スマート」に旅を楽しむ「3つのS」を軸とした旅行を考えるべきだろう。コンテストの作品群が、今後のASEAN旅行の多様化と魅力の拡大につながることに期待したい。

注目の受賞作品を紹介(■は審査員のコメント)

●ASEAN企画大賞

「見て、聞いて、嗅いで、触って、味わう 五感が目覚める
メコン川ECOクルーズ8日間」

建部恵世さん(NICインターナショナルカレッジインジャパン)

働く女性をターゲットにした、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムの周遊エコツアー。ラオスではハーブの食文化を体験。トンレサップ湖の水上生活やクラティエの川イルカを見学し、メコン川で交錯する文化と生活、さらに生態系を体験する。またCO2排出を考慮して、バンコク/ノンカイ間は夜行列車、シェムリアップ/プノンペン間、プノンペン/ホーチミン間は高速船を利用。アンコールワットでは自転車による観光も取り入れた。

■「環境保全、エコビジネス、地産地消などのテーマをうまく取り入れています。船での移動を組み込んでいるのも新しい」(志賀氏)

●ASEANテーマ賞

「日メコンももっとも交流年しよう！メコン地域1日日本語教師16日間」
乾麻衣子さん(ホスピタリティツーリズム専門学校)

カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ、ベトナムの各国で日本語学校を訪ね、日本語教師を体験。授業を充実させるため、旅行前には日本の日本語学校を訪ね、日本語教師との懇談も設けた。宿泊は学生宅にホームステイ、観光も学生に案内してもらう。ベトナムではアオサイを着ての学生体験も。

■「日本での事前学習や訪問する学校などがよく考えられている。自分の視点で興味のあることを押さえているのがいい」(五十嵐氏)

「イスラム拡大の歴史をたどる 海のシルクロードツアー」

中谷衣里さん(立教大学)

イスラム教伝播のルートをたどるツアー。マレーシアではマラッカ、インドネシアではジャカルタ、ジョグジャカルタ、スマランを訪ね、イスラム教、仏教、ヒンドゥー教にゆかりの場所、王宮などを観光。ジャカルタでは世界最大のイステイクル・モスク観光、ブルネイでは一般市民の家庭訪問も取り入れた。

■「内容がまとまっており実現性が高い。観光のポイントが一般のツアーの観光から外れている点も目新しい」(楠山氏)

●日メコン交流年特別賞

「卒業旅行は民族衣装で★ミャンマー&ラオス
伝統と文化の8日間」

上田麻未さん(ホスピタリティツーリズム専門学校大阪)

女子学生の卒業旅行として提案された、ミャンマーとラオスの衣食住を通じて伝統と文化を体験するツアー。ラオスでは民族衣装をオーダーし、それを着て観光する試みも。またミャンマーの伝統暦「八曜日」占い、ラオスの儀式「パーシー」も体験。ホームステイで料理を作り合うなど、コメ文化の違いにも着目した。

■「卒業旅行を体験型企画で演出。民族衣装というテーマも興味深い」(細谷氏)

●中・高生特別賞

「お母さんたちのASEANウルルン滞在記」

建部祥世さん(東京都立国際高等学校)

家族のために頑張るお母さんに、文化体験と感動の出会いを味わってもらうツアー。タイ、カンボジアで地元の主婦とペアを組んで買い物、料理づくりを行うほか、通訳を通じて、子育ての知恵や節約方法についての意見交換会、通訳なしのホームステイも行う。

■「視点が良い。民族舞踊アプサラの体験も入れるとベター」(米沢氏)

「寝ても起きてもボルネオ島～最初から最後までボルネオ島だけをまわる旅～」

橋富一博さん(渋谷教育学園渋谷中学高等学校)

ボルネオ島内の3カ月国の周遊旅行。ハウスボートに乗ってマハカム川をクルーズ、タンジュン・イシュイの先住民族の村を訪れる。またブルネイでは7つ星ホテルに宿泊、コタキナバルではイギリス統治時代の蒸気機関車、北ボルネオ鉄道のSL列車に乗車。

■「ボルネオの民族と自然と文化、歴史など、旅行業から出てこない視点がある」(小林氏)



ビエンチャンのワット・ホーバケオで、日本語学校の学生と。「彼女たちは肌の色も髪の色も、メンタルの面でも日本人に似ていて、思っていた以上の交流ができました」(建部さん)



プノンペンでは女子大生たちが英語で街を案内。遊び方に国境はないようだ
地元の学生との市内観光にはトゥクトゥクを利用。料金交渉は地元の学生が担当

夜行列車に民族衣装、日本語教師体験

受賞者たちが自らの企画を現地で検証

夜行列車に乗ってビエンチャンへ

最初に向かったのは、バンコク中央駅。ここから「ASEAN 企画大賞」を受賞した建部恵世さんの企画に沿って、夜9時発の夜行列車で国境の町ノンカイに向かい、メコン川を渡ってラオスに入る。車両は歴史を感じる造りだが清潔に保たれており、一等寝台には折りたたみ式の2段ベッドと洗面台、ミネラルウォーターが備えられていた。列車は市場や住宅街の脇を抜け、都会の片隅をゆっくりと進んでいく。窓には車道を行き交うオートバイや人々がたむろする屋台が映り、まるで影絵を見ているようだ。こうして夜汽車の旅情を満喫し、大幅な遅延がなかったこともあって、13時間の乗車は思っていたよりもずっと快適だった。

ビエンチャンでは、国内最大のマーケット「タラートサオ」内の専門店です民族衣装「シン」をオーダーした。これは「日メコン交流年特別賞」の上田麻未さんのアイデアだ。スカートのオーダーはUS \$10。シンプルな巻きスカートなので、ウエストなど4カ所を採寸すれば、翌日には完成しており、リクエストすればホテルに届けてくれる。

夜は「ASEAN テーマ賞」の乾麻衣子さんの企画で「チャンパ日本語学校」で日本語教師を体験した。先生のアシスタントとして、7歳から40代までの生徒を相手に、にこやかに大きな声で単語を発音していく。授業を終えた彼女たちからは「日本に興味を持ってくれてありがたい」「日本語の面白さに気づかされた」などの感想が聞かれた。

翌日は全員がシンを着用し、日本語学校の学生の案内で観光を楽しんだ。また、民族衣装の威力も大きかった。カラフルなシンを着て歩く彼女たちは、観光客や地元の人にも

大人気。「意外に風通しは悪かった」そうだが、美しいシンは多くの出会いを届けてくれた。

実現できなかった企画とは

一方で、実現できなかった企画もある。まずは、建部さんが企画した高速船での移動だ。乾期のため、シェムリアップ/プノンペン間の川の水量が少なく、高速船自体が欠航。そのため一行はバスで6時間をかけて移動したのだが、道沿いには高床式の住宅、牛が歩く水田、ハンモックが並ぶ休憩所に結婚式会場など、農村地帯ならではの風景が広がり、楽しいドライブとなった。ただトイレや食事の場所はかなり限定されるため、現地ガイドの力量が問われそうだ。

受賞者全員が企画していた「ホームステイ」「ホームビジット」も実現しなかった。ラオスやカンボジアでは、ホームステイがビジネスとして確立しておらず、一般住宅には衛生面の問題もある。だが、カンボジア中央部の町バレーにある「クメールビレッジホームステイ」のように、旅行者向けに建てられた伝統的家屋に滞在し、地元の村で生活や文化を体験できる施設も出てきている。こうした施設が今後増えることを期待したい (<http://www.khmerhomestay.com>)。

旅行を終えた彼女たちからは、頼もしい意見が聞かれた。「夜行列車やトゥクトゥクなど地元の乗り物を使う楽しさを知りました」(乾さん)、「気候や体の負担を考え、今度は日程に余裕のあるツアーを考えたい」(上田さん)。「プノンペンは都会だし、シェムリアップにはリゾートの要素も。カンボジアに素敵な面があることを伝えていきたい」(中谷衣里さん)。「アジアは深い!と実感しました。旅行前よりずっと、近い感情を抱いています」(建部さん)。